

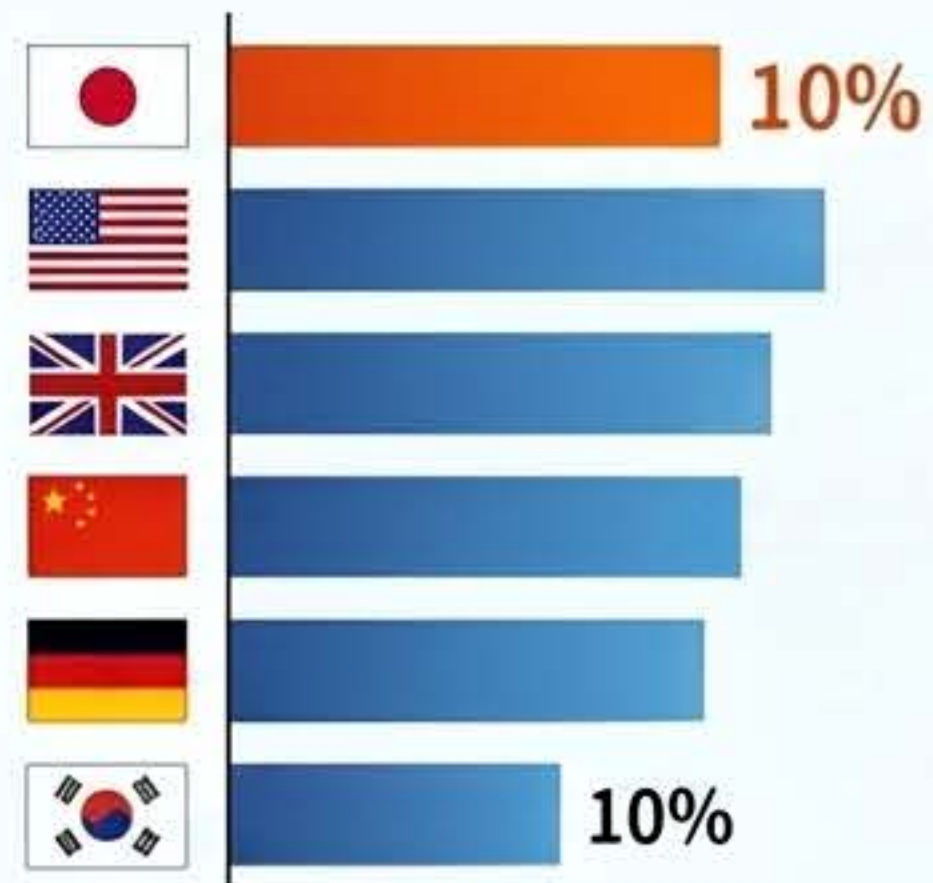
生成AI実態調査2026：日本企業の「活用」は進むが「成果」で出遅れる現実

1 活用率と成果の「温度差」



国内活用率は87%へ急増
2026年春の調査では「活用中・推進中」が前年比+11ポイントと大幅に増加し、導入自体は一般化しています。

「期待を大きく上回る効果」は6カ国中最下位



日本は期待を超えた割合が最も低く、逆に「期待未達」や「未評価」の割合が他国に比べて突出して高いのが現状です。



評価不在が招く「導入して終わり」の罠

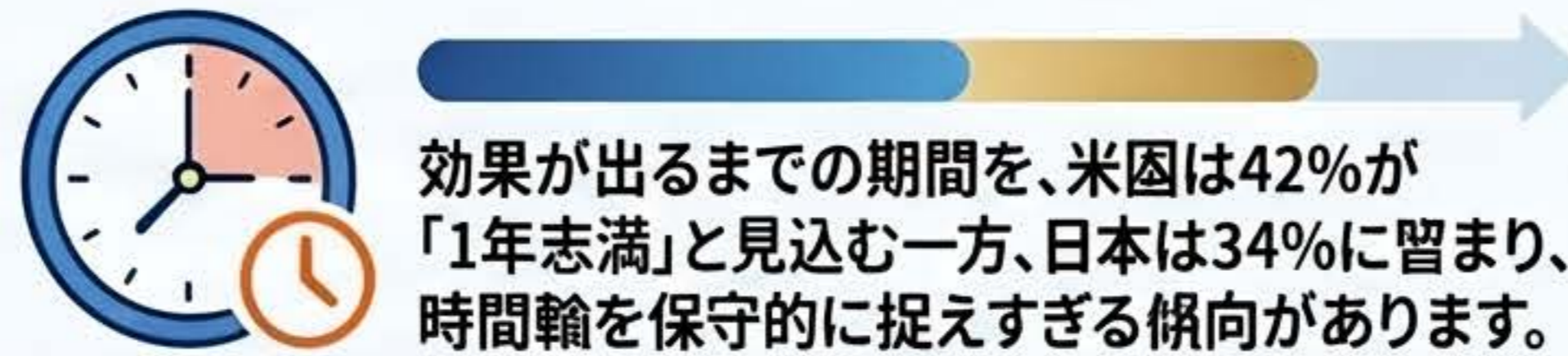
日本企業の13%が「まだ効果进行评估できていない」と回答(米国は0%)。効果を測らず改善に繋がれない姿勢が、成果の差を生んでいます。

2 世界との決定的な「還元」の差

財務的還元(給与・価格)はわずか40%



保守的な効果発現の時間軸



危機感 vs 変革チャンスの認識



日本: ビジネス消失の危機感が強い



世界: 根本変革のチャンスとして前向きに採る姿勢で後れを取る

3 成果を創出する「変革サイクル」の構築

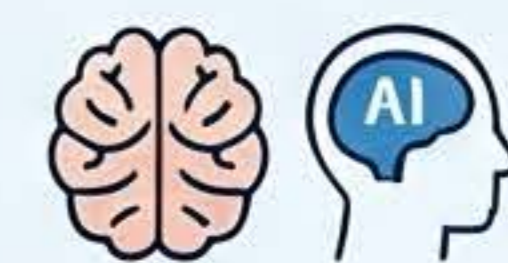


先進企業に見る「AI前提」の経営



南江堂

理念を北極星にした手段としてのAI
AIを競争優位の武器ではなく、課題の顕微鏡を逐次解決する手段として再定義。



JT

人と組織の役割を再設計
AIエージェントが主体となる「シンギュラリティエンタープライズ」を発掘し、問いを立てる力など人固有の価値を再構築。



MS&AD

供給を「構想」から「予防」へ
生成AI厚層機能の開発を通じ、リスクを前向きに予防することで、社会が安心してAIを使える実用基盤を提供。